

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

発生予察情報の送付について
病害虫発生予察特殊報（第1号）を下記のとおり発表したのを送付いたします。

令和元年度 病害虫発生予察特殊報（第1号）

令和元年9月2日
愛媛県病害虫名 ツマジロクサヨトウ (*Spodoptera frugiperda*)

作物 飼料用トウモロコシ

特殊報の内容 愛媛県における発生及び食害被害の初確認

1 発生地域 西予市

2 発生経過

令和元年8月29日、西予市の飼料用トウモロコシ圃場において、ツマジロクサヨトウ疑義幼虫による食害が確認され、被害株から幼虫を採集し農林水産省神戸植物防疫所に同定依頼した結果、9月2日に県内未発生のツマジロクサヨトウであることが確認された。

国内では、令和元年7月3日に鹿児島県の飼料用トウモロコシで初めて確認され、その後、熊本県、宮崎県、長崎県、大分県、沖縄県、佐賀県、高知県、茨城県、福岡県、岡山県、千葉県、山口県の13県で発生が確認されている。これまでのところ、国内での発生は飼料用トウモロコシでの発生が主であるが、スイートコーンやソルガムでも確認されている。

3 形態及び生態

成虫は開張約37mm、雌雄で外観が異なり雄のみ前翅中央部に黄色い斜めの斑紋がある（写真1）。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、雌の体毛で覆われる。終齢幼虫の体長は約40mm、頭部中央の逆Y字が淡色で（写真2）、尾部の刺毛基盤（黒色斑点）が隆起している（写真2）のが特徴である。

本種は南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬できないとされている。

4. 被害の特徴

幼虫が植物の茎、葉、花並びに果実を食害する（写真3）。若齢幼虫は葉を裏側から集団で加害し、成長すると加害しながら分散する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

5. 防除対策

- (1) 多発すると、被害が拡大する恐れがあることから、圃場をよく見回り幼虫の早期発見に努める。
- (2) 県は、発生圃場においては、植物防疫法第29条第1項に基づく措置を行うこととし、国との協議により選定した表1に示す薬剤の散布を行うか、薬剤散布が困難な場合は、早期刈取りによるサイレージ処理を実施する。
- (3) 幼虫の分散を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。
- (4) 農薬の使用にあたっては、散布は無風又は風が弱い時に行うなど近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向、防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散（ドリフト）に留意する。



写真1 ツマジロクサヨトウ雄成虫(左)と雌成虫(右) ※植物防疫所HPより



幼虫頭部中央
(逆Y字)



幼虫尾部
(刺毛基盤の隆起)



写真3 飼料用トウモロコシの被害

写真2 ツマジロクサヨトウ幼虫
※矢印は本虫の特徴

表1 飼料用トウモロコシに使用できる農薬一覧

農薬の種類	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布液量	使用回数
パダンSG水溶剤	1000倍	散布	収穫21日前まで	100~300L/10a	2回以内
モスピラン水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤	6000倍	散布	収穫90日前まで	100~300L/10a	3回以内
スミチオン乳剤	2000倍	散布	収穫30日前まで	100~300L/10a	2回以内
トアロー水和剤CT サブリーナフロアブル	1000倍	散布	発生初期 但し収穫前日まで	100~300L/10a	—
エスマルクDF フローバックDF エコマスターBT	2000倍	散布	発生初期但し、収穫前日まで	100~300L/10a	—

※上記の農薬はツマジロクサヨトウに対して登録はありませんが、植物防疫法第29条第1項の規定による防除を行うための農薬として使用が可能です。

※上記、希釈倍率、使用方法、使用時期、散布液量、使用回数を守ること、出荷停止等、流通に支障が出ることもありません。

※上記の作物以外で使用可能な農薬については、農林水産省HPをご参照ください。

http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/attach/pdf/tumajiro-21.pdf